

String
Fiction Series

2

弦楽四重奏団 b



YAMANAKA TOMOTAKA

山中與隆

Duo-Yamanka

弦樂四重奏團

b

山中與隆

目次

弦楽四重奏団 b 1

〔天野弦人のこと〕 1

〔弦楽四重奏団の結成〕 24

〔練習は始まった〕 60

〔解散〕

101

編者あとがき

114

弦楽四重奏団 b

作 山中與隆

〔天野弦人のこと〕

天野弦人（げんと）は小学三年のときバイオリンを習っている友達に憧れ、親にねだってその友達と同

じバイオリン教室に通い始めた。

教室ではまず弦人の体格に合う楽器を買うことから始めなくてはならなかった。月々のレッスン料以外に楽器一式、教則本などの出費を知って、両親は弦人が本当に続ける気があるのか念を押した。しかし小学三年の子供には、友達がやっていることを自分もやりたいと言う以上の強力な動機があるものでもない。それでも親は、ねだる弦人に根負けしてレ

ツスンに通わせることになった。

弦人は、教室で世話されたひょうたん型の小さなケースに入った二分の一サイズの新しいバイオリンと、これもセットに含まれている音符の模様が入った真新しい教則本入れの手提げを持って、友達と一緒に意気揚々と通い始めた。

友達は四歳の頃から同じ先生のレッスンを受けていたので、先生にもレッスンにもすっかり慣れて

いる。それで何かと、始めたばかりの弦人の世話をやいたりもした。しかし弦人とその友達のレッスンの内容は当然違っていた。すでにレッスンを受け始めて五年以上になる友達は教則本第六巻の終わりの方まで進んでおり、弦人は第一巻の最初からである。というより楽器の扱い方から始まるのである。それでも弦人は、自分もすぐに友達と同じようにいろいろな曲をかつこよく弾けるようになると思つて、先

生の言うことをよく聞いていた。

ところが三か月経つても弦人はバイオリンの構え方や、弓の持ち方の指導から抜け出せず、音を出すと言つてもブーブーと長い音を引つ張るだけのレッスンが続いた。先生としても、子供を飽きさせないためにいろいろなことを弦人にやらせようとするのだが、弦人は不器用でなかなか新しいことを覚えられなかった。

半年も経ったころ弦人は、バイオリンのレッスンを辞めたいと言いつ出した。この間家でバイオリンを弾く弦人を見たことも無いし、レッスンのことを話すこともなくなっていた弦人を見ていたので、両親は

「やっぱり」

と思ひ、やる気のなさそうな弦人に無理強いすることなくレッスンを辞めさせたのだつた。

それから四、五年経ったある夜、弦人は父親が静かにCDを聞いている部屋から何とも魅力的な楽の音が流れてくるのに惹かれて部屋の入り口でじつと聞き耳を立てていた。弦人は中学生になっていた。勿論弦人にはそれがバイオリンの音であることはわかったが、そのように弦人の心に響いたのは初めてだった。弦人は十五分以上もそうして聞いていたが、父親も集中して聞いていたので、弦人がいることに

気が付かなかつた。曲が終わってCDを入れ替えようとして立ち上がったときに、父親は初めて弦人がいるのに気付いた。

「何だ、何か用があるのか？」

父親は弦人に聞いた。

「いや別に用じやないけど。いまのバイオリンだね。良い音だね。あんなの今まで聞いたことなかつたけど」

「そうか？お父さんこれまでもよく聞いていたけど、気が付かなかったのか？」

「この曲かけたことあるの？」

「もちろんだ。これはお父さんが好きな曲で、結構何回もかけていたはずだよ」

「何ていう曲？」

「これは、バッハの無伴奏バイオリン・パルティータ第三番だ」

「へーっ。でも今のバイオリンの音、凄かったね」

「そう思うか」

そのとき父親は、もう一度バイオリンやってみるか、と言いかけたがやめた。これくらいの年齢のときは、仮に自分はそう思っていたとしても、他人に、特に親なんかには言われると否定するものだと思ったのだ。それで父親は、

「実は今のCDで演奏していた人が、今度来日して

この曲も弾くので、お父さんは聞きに行こうと思つてゐるんだ。京都まで行かなきゃならんが、是非聞きたいと思つてね」

「いつ？」

「まだ三か月も先だよ。まだ切符も買つてないけどね」

「僕も連れてつてもらえる？」

「もちろんいいけど、学校があるだらう？」

「お父さんも仕事あるんでしょ？」

「休み取るつもりだ」

「じゃ、僕も」

「たまにはいいか。じゃ切符二枚買うことにするよ」

京都のコンサート会場で、弦人と父親は満員の客の中に混じって座っていた。開演時間が近づくと係りの女性が、客席の通路をくまなく歩きながら携帯

や時計のアラームを切るようにふれて回った。特に携帯は、マナーモードにしたのでは駄目で、必ずスイッチを切るように何べんも言つて歩いていた。

やがてステージが明るくなり、下手側から金髪を無造作に後ろに束ねた背の高い女性が、バイオリンと弓を片手にステージの中央に出てきた。微かに笑みを浮かべてお辞儀をしてから、楽器を構えた。弦人たちの席は比較的前の方だったので、演奏者を少

し見上げるような感じだった。

彼女は一瞬集中した表情になると、速い動きの音楽を弾き始めた。父親がCDで聞いていた曲であることが弦人にも直ぐにわかった。それはCDで聞いたのとはまるで次元が違うような迫力で弦人の胸に迫ってきた。隣で聞いている父親も同じことを感じていた。

それは室内楽専用のあまり広くない会場だったの

で、彼女は楽に弾いているように見えるのに、その音はホールいっぱい響き渡るのだった。

彼女はバッハの無伴奏バイオリンのためのパルティータとソナタの中から三曲を休憩時間も取らずに弾き、アンコールを一曲弾いて一時間半足らずで演奏会は終わった。

新幹線の最終便で広島に帰る車中で、二人はほとんど話をしなかった。二人の頭の中には、聞いたば

かりのバイオリンの音が鳴り止まなかつたのである。

京都のコンサートから帰つた翌日、学校から帰つた弦人は、半年でレッスンを辞めて以来、押入れに仕舞い込んだままになつていたバイオリンを引つ張り出した。二分の一サイズのバイオリンは中学生になつた弦人には小さくなつていたが、おそるおそる音を出してみた。京都で聞いたバイオリンのイメー

ジはまだ鮮明に残っていたが、それがバイオリンの音だとしたら、自分がそのとき出した音はとてもバイオリンの音とは言えないものだった。

弦人はちゃんと習えばあのような音が出せるのだろうかと考えた。そして自分があの背の高い女性と同じような音で同じ曲を弾いている姿を想像した。

弦人はかつて一緒にレッスンに通った友達のことを思い出した。彼も同じ中学校に行っているがずつ

と会っていない。しかし何故かどうしても会ってみ
たくなつて、弦人はその友達の家に行つた。

彼は家にいた。本当に久しぶりだったにもかかわ
らず親しく弦人を迎え入れてくれた。

彼は今も同じ先生についていると言う。おそらく
随分進んでいることだろう。弦人は友達にバイオリ
ンを聞かせて欲しいと頼んだ。友達は聞かせるほど
上手く弾けないと言つたが、弦人が真剣に頼むので

楽器を持ち出してきた。彼の楽器は、一緒に通つたときのものとは違つて、大きくて飴色に輝く立派なものだつた。弦人が家でメモしてきたバッハのパーティータ第三番を弾くように頼んだが、友達はその曲はまだ習つたことがないと言つて、バッハの別の曲を弾いてくれた。

友達の演奏は、弦人が京都で聞いたような勢いも、音の艶も、響きの豊かさもなかつたが、それでもか

なり良い感じに聞えた。

弦人は帰宅すると、母親にもう一度バイオリンのレッスンを受けたいと言った。母親は、駄目だとは言わずに、夜お父さんが帰ってきたら相談しようと言った。

父親は京都での弦人の様子から、そう言い出すよ
うな予感がしていたので、直ぐに弦人の願いは叶え
られた。弦人は再び友達と同じ先生のレッスンを受

けることになった。教則本は前に買ったものから始めることになったが、バイオリンは普通サイズのものに買い換える必要があつた。たいした足しにはならなかつたが、先生は手持ちの二分の一サイズのパイオリンを下取りしてくれた。

これが弦人にとって本当のバイオリン人生の始まりだつた。

弦人は京都の大学に行くまでレッスンを続け、その後は夏休みなどで帰ったときに、同じ先生のレッスンを受けた。大学ではオーケストラに入り三年の時にはコンサートマスターにもなった。

就職は、少し前に母親と別居していた父親のコネで名古屋に本社のある会社に入った。最初は名古屋が勤務地だったが、その後東京、富山、福岡と転勤した。弦人はその転勤先では必ず地元のアマチュア

オーケストラに入つて、音楽を続けた。

そのような仕事と趣味を両立させる生活を、弦人は定年になるまで四十年近く続けた。そして定年後は、東京勤務時代に結婚した妻と、弦人の郷里広島に帰つて、『音楽三昧』と言つて人が羨むような、リタイア後の生活を送るのである。

広島でもアマチュアオーケストラに所属したが、弦楽四重奏を本格的にやりたいと思うようになって、

オーケストラは数年で辞めた。

〔弦楽四重奏団の結成〕

オーケストラを辞めた弦人は、かねてからの夢であつた弦楽四重奏団を立ち上げることにして、メンバーを選びを始めた。

自分が第一バイオリンを受け持つつもりなので、第二バイオリンをしてくれる人、それにビオラとチ

エロを探す必要がある。

弦人はこれまで地元で知り合った人たちの中から最も上手く行きそうなメンバーを探すことにした。もちろん弦人がいいと思っても、相手が参加してくれるかどうかはわからない。

まずメンバーの年齢を考えた。自分が六十半ばなので、だいたいそれくらいの歳の人たちが望ましい。年齢が近いと考え方も似ているので余計な気を使う

必要が無い。

演奏技術は上手いに越したことは無いが、自分とかけ離れていないのがいい。上手いからといってプロのような人は、どんな曲でも弾けるだろうが、一緒に続けるには問題がある。上手い人から見ても、下手な人の弾き方には不満が出てしまう。プロとアマでは、コンサートなどで聞いて感じるよりも、一緒に弾くとはるかに大きな差があることがわかるもの

である。

第一そんな人とする事になつたら、自分が第一バイオリンをするわけに行かなくなる。

弦楽器の技術は奥が深い。指だけはよく回るが音楽性が足りないのも困る。室内楽がどれほど好きかということも大切な要素である。クラシック音楽好きでも、大規模な管弦楽曲が好き人は、室内楽には関心が薄い人が少なくない。

また四人が度々顔を合わせて共同で音楽作りに取り組むわけだから、お互いが人間的に尊敬できるかどうかかも知れない。

このようなことを考えるとなかなかこの人だと言える人はいない。弦人はこれまでも、あちこちのオーケストラに入っているときに、そのオーケストラのメンバーと弦楽四重奏を楽しんできたが、長く続けて行きたいと思うようなメンバーが揃ったことは

無かった。

もつともそのころは弦人自身が転勤で一箇所にくいながったので、それですんでいた。

転勤もなくなつた弦人がいま考えているのは、じつくり腰を落ち着けて長く続けられるような弦楽四重奏団だった。

弦人は来る日も来る日もバイオリン、ビオラ、チェロを弾く人の名前を思いつくままに書いたり消し

たりしながら考えた。

それらの中に、弦人が是非引き受けて欲しいと思うチェロ奏者が一人いた。年齢は弦人より少し上だが、何と云ってもその人のチェロの音色は素晴らしいのだ。楽器も良さそうだが、そのせいだけでない。彼の音楽性がそうさせているのだ。

しかし、弦人はその人物とオーケストラの同僚と
いう以上の付き合いがなかった。彼はチェロパート

のトップで、しかも役員もしていたが、弦人はトップでも役員でもなかったもので、パートが違うこともあつて彼との接点があまり無かつたのである。

オーケストラ時代の名簿があるので連絡先はわかるが、

「一緒に弦楽四重奏をやりませんか」

と誘うには勇気がいる。彼ほどの弾き手ならずでに誰かとやっているかもしれない。あるいは在籍期間

の長くなかった自分のことなどよく知らないかもしれない。

弦人は電話番号を前にして躊躇した。女性に

「付き合ってください」

と告白するようなもので、断わられることが怖いのである。

しかしある晩、意を決して電話することにした。

四、五回のコールで女性の声が電話に出た。奥さ

んかもしれない。弦人は、

「私、天野と言つてご主人と同じオーケストラでバイオリンを弾いていた者ですが、隆文さんはご在宅でしょうか？」

「あの、すみません父は今日出張でまだ帰っていません」

「何時ころ帰られるかわかりませんか？」

「母とかわります」

電話を取ったのは、天野隆文の娘だったようだ。

「お電話代わりました、尾長の家内でございます。

主人はあいにく長崎の方に出張で、今日帰ることになっているのですが何時になるかわかりません。何か伝えることがあれば言っておきますが」

「そうですか、でもいろいろご意見もお聞きしたいので、改めて私の方から連絡します。たとえば、明日の夜はいらっしゃいますか？」

「いると思います。普段は八時ころには帰っていることが多いので・・・」

そのときそばで、先ほどの娘らしい声がして、『明日音楽会』と言っているのが聞えた。

「明日も主人の帰宅は遅いと思いますが」

「電話、遅い時間でもよろしいでしょうか？」

「家は何時でもかまいませんけど」

「では、明日の夜にでもお電話してみます。どうも

失礼しました」

弦人は話の核心を尾長隆文に告げなくてすんだので、少しホツとした。もちろん先延ばしになっただけで、一度電話してしまつたから、いずれにしてももう言わないわけには行かない。

次の日の夜、弦人はウィーンから来日中の弦楽四重奏団の演奏会を聞きに行った。実は昨夜の電話の

ときはこのことを忘れていたのだが、十時には家に帰れるから大丈夫だろうと考えた。

ところが音楽会場で弦人は尾長の姿を見かけた。尾長隆文も聞きに来ていたのである。尾長は弦人に気付いていないようだった。弦人は話し掛けるかどうか躊躇した。結局弦人は休憩時間に話すことにして自分の席に着いた。前半の演奏を聞きながら弦人は尾長が何処に座っているのか探した。尾長のいる

ところは見つかった。彼は禿げ上がった頭で見つけやすい。

休憩時間に弦人はまずトイレに行き、それからロビーに出て辺りを見回した。尾長の姿は無かった。弦人はしばらくロビーをうろうろしていたが、後半が始まるブザーがなったので、自分の席に戻った。席から見ると尾長が席についているのが見えたので安心した。

アンコールも終わったとき、弦人は出口に急いだ。ロビーから外に通じる広いドアの近くに弦人が立っている、

「天野さんじゃないですか」

弦人の後ろから尾長が声を掛けてきた。そして、

「昨夜お電話いただいたそうですが、何でした？」

と、先に切り出された。弦人は言葉に詰まったが、「実は尾長さんとゆっくりご相談したいことがあつ

たので、」

「そうでしたか。よろしかったら向かいのコーヒーショップでもお話を伺いましょうか」

「尾長さん、時間は大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

尾長隆文と天野弦人は肩を並べてホール前の道を横切り、スタンド式のコーヒーショップに入った。

尾長はさつさとカウンターに行つてブレンドコーヒ

ーを注文し、弦人に何にするか聞いた。弦人が同じものをと言うと、尾長は店の女性にブレンド二つと言つて、会計をしようとした。弦人は慌ててブレンドコーヒーの値段を掲げてある一覧表から見つけて、ちようど二百五十円を尾長に渡した。尾長はそれを受け取つて自分の分を足して支払いを済ませた。

二つの紙コップが載せられたトレイを尾長が持つて、壁際の席に着いた。時間が遅めだったためか店

内はあまり混んでいなかった。

席について二人はコーヒーを一口飲んだ。

「今日の演奏は、いかにもウィーンの人たちらしい良い演奏でしたね」

先に口を開いたのは尾長だった。弦人は、尾長がコーヒーショップに行こうと言った辺りからずっと尾長のペースで運んでいるなと思った。尾長は穏やかな話し方で威圧感はないが、声が低くてよく通る。

弦人は何となく押されっぱなしだと感じていた。弦楽四重奏団でも、尾長がいると彼のペースで物事が進むことになりそうだと思った。弦人としては、自分が仕切らなくてはならないと考えているわけではないが、あまり強力に仕切りすぎる人もありがたくない。

弦人は一瞬、弦楽四重奏団に誘う話を出すまいかと考えたが、もう間に合わなかった。尾長が、

「ところでお電話の件は何でした？」

と言ったのである。弦人は覚悟を決めて予定通りの話をした。

「実は、弦楽四重奏をじっくり取り組むようなメンバーでやりたいと思ひまして。それで、尾長さんにチェロをやってもらえないかと思つたので、そのお願いの電話でした」

「そうですか。それで天野さんはとてもお上手だつ

たから、もちろん第一バイオリンをされるおつもり
でしょうが、第二バイオリンとビオラは決まってい
るのですか？」

尾長は、オーケストラでの弦人の存在をちやんと
認識していたようだ。

「それはこれからです」

「じゃ、いまのところ私と天野さん二人ということ
ですな」

「尾長さん、一緒にやっていたただけるのですね？」

「勿論です。オーケストラのアンサンブル大会などで、その場限りの四重奏はやりましたが、僕も天野さんがおっしやるような弦楽四重奏団をやりたいと思っただけです。是非お願いします。むしろこちらからお願いしたいくらいですよ」

弦人は、自分が先に言い出してよかったと思った。尾長から先に誘われたら、間違いなく完全に尾長の

ペースになつてしまふ。それだけでなく、尾長が初めから考えたなら、第一バイオリンとして自分を選ぶかどうかわからないとも思った。

「弦楽四重奏では内声が結構大事ですよ」と、尾長。弦楽四重奏で内声というのは第二バイオリンとビオラのことである。

「ええ、もちろんです。誰か良い人いますかね？」
弦人は尾長が参加すると言つたので、彼を巻き込

んで話を進めることにした。一緒に人選を考えれば、今後のためにも何かとスムーズに行くと思つたのだ。弦人にも考えてきた候補者がいるのだが、そのとき尾長は内声に相応しい人を知っているかもしれないと思つて、尾長に振つてみた。

しかし尾長がしばらく考え込んで黙っていたので、弦人は自分が考えた内声の二人の名前を出した。いずれもオーケストラのメンバーだったので尾長も知

っている人たちだ。

「バイオリンは井上孝子さん、ビオラは上村肇さんを考えて見たのですがどう思われますか？」

「悪くないですね。井上さんも上村さんもオーケーされたのですか？」

「いや、さつき言ったように、まだ頼んでいません」
弦人が提案した井上孝子は、弦人より少し下の年代の主婦で、弦人の評価では結構音楽的に弾くバイ

オリニストだ。技術もしつかりしていて、ときどき第一バイオリンと第二バイオリンを交替してやってもいいと考えている。

ビオラの上村肇は弦人と同じくらいの年齢で、彼のビオラの音色も素晴らしい。アマチュアで彼ほど見事な低音を出すビオラ奏者を、弦人は聞いたことが無いくらいだ。

だが、尾長は新たな名前を挙げた。

「バイオリンは伊能さんでもいいかもしれないね」

尾長が言ったのは、やはりオーケストラに入っている伊能美樹のことで、弦人が彼女に持っているイメージは、おそらくオーケストラで最も美しい女性であることと、バイオリンは特に上手い人ではないと言うことである。まだ三十過ぎの既婚の女性で子供もいる。

「私は、比較的世代が近い者同士がいいと思って井

上さんを考えたのですが、伊能さんは年齢的に私たちよりも離れすぎていませんか？」

「天野さんが同世代の人たちで固めようと思われているのは、いま挙げられた名前を聞いてわかりました。若い人が混じっていると、年寄り同士で変に気が合ってしまうのを防ぐ点で大事だと思いますよ。伊能さんだったら思ったことをはっきり発言しますし」

弦人は、折角尾長が提案した人物を否定することも出来ず、黙っている、尾長が続けた。

「井上さんは、第二バイオリンとしては主張が強すぎませんか？第二バイオリンはむしろ控えめが良いと思いますよ」

尾長は内声が重要だと言ったばかりなのに、その言葉に矛盾していると弦人は思った。そもそも彼が提案した伊能は、井上と比べて音楽性の点で比較に

ならない。それは控えめかどうかと云うような問題ではないと弦人は思った。そのことを言おうかどうか弦人が迷っていると、

「いいじゃないですか。天野、伊能、上村、私というのはまとまりが良いと思いますよ」

尾長はあくまでも伊能を入れたいらしい。

「伊能さんは他のメンバーの名前を聞いて、自分だけ年齢が離れているので嫌がりませんかね」

弦人は何とか第二バイオリンを井上にもどしたいと思つて抵抗して見たが、

「心配しなくても大丈夫ですよ。伊能さんはきつと引き受けてくれますよ」

弦人は、自分が心配しているのは伊能が引き受けるかどうかではないと言いたかつたが、『まあ、いいか』と考へた。尾長の意見も入れておいた方がこの先やりやすいかもしれない。それに上村の代わりに

別のビオラを提案されるよりましだと思つた。

「じゃ、それで行きましようか。伊能さんには尾長さんから誘つてもらえますか？」

「ええ、そうします」

尾長は嬉しそうに引き受けた。そして二人は、いつから練習を始めるかとか、最初に何を練習するかなどと期待のこもった話をしてから別れた。

弦人が家に着いて三十分もしない中に尾長から電

話がかかってくる。

「伊能さん是非参加させて欲しいと言うことだったので、お願いしました。それから彼女、《アメリカ》がしたいって言ってました。最初に練習する曲としては適當かもしれませぬね」

練習曲目まで尾長ペースだ。曲は伊能ペースなのかもしれないが、弦人も《アメリカ》は反対でなかった。

「そうですね、《アメリカ》からやりましようかね」と、言ったのだった。そして、

「上村さんにはまだ言っていないので、これから早速連絡して、結果はすぐにご連絡します。電話、遅くなっても構いませんか？」
と言つて電話を切つた。

弦人は直ぐに上村に電話した。上村も在宅していて弦楽四重奏団結成には積極的に賛成した。そして

弦人が、第二バイオリンは伊能美樹、チェロは尾長隆文と言うと、

「伊能さんですか・・・」

と電話の向こうでつぶやくのが聞えたが、

「わかりました。よろしくお願いします」

とはつきりした声で返事したのだった。

弦人は上村が参加してくれることを尾長に伝えて、昨夜からの熱のこもった電話のやり取りを終えた。

しかし弦人の心の中には、音楽的にバイオリンを弾く井上孝子が入っていないことが残念だという気持ち
ちが拭い去れなかった。

その晩、弦人は決まった四人で弦楽四重奏をして
いる姿を想像してなかなか眠れなかった。

〔練習は始まった〕

結成なった新しい弦楽四重奏団の初練習は弦人の

自宅で行なわれた。ビオラの上村が三十分くらい早く来たので二人で、弦人の妻が入れたコーヒ―を飲みながら話していると、ほどなく尾長と伊能が一緒にやっってきた。伊能が尾長の車に便乗してきたのだった。

四人は弦楽四重奏団のこれからのことを少し話してから、早速練習を始めた。

新しい弦楽四重奏団の最初の練習曲はドボルザ―

クの《アメリカ》である。みなそれぞれいろいろなところで何度も弾いたことのある曲で、アマチュアが特に好む弦楽四重奏曲の定番である。

ところが伊能だけが、曲は知っているが弾くのは初めてだと言う。弦人は井上だったらそんなことは無いだろうと思った。

実際に弾き始めると、弦人の心配は直ぐに現実となった。冒頭第一バイオリンに一拍半遅れで第二バ

イオリンが入つてくるところで、伊能は出られなかつた。初めからやり直したが伊能は出られない。第二バイオリンがどのように出るか譜面で確かめてから、もう一度やり直したが伊能はやはり出られない。確かにこの冒頭は心得ていないと出にくいところである。最初に弾き始める第一バイオリンが一拍目ちようどからでなく、一拍目の裏つまり半拍遅れで、メロディではなく伴奏形を弾き始めるところがトリ

ツキーなのである。第二バイオリンのあと出てくるチェロも出にくさは同じなのである。第二バイオリンとチェロが正しく出ないと、颯爽と始まるビオラの素晴らしい第一主題も出られない。この主題は、すべての室内楽好きのビオラ奏者が弾きたがる有名なメロディである。

チェロの尾長が、

「この曲初めての人には難しいところだから、一度

うんとテンポを落として確かめてみよう」

と伊能に助け舟を出した。伊能も、

「すみません。お願いします」

と、言つて顔を赤らめている。

極端にテンポを落として、尾長が声に出してカウントして、やつと伊能は正しい場所に入れた。

「よし、それでいい。じゃ、テンポを戻してやってみようか」

しかし速いテンポにすると伊能はやはり入れなかった。三人は構わず先に進んだ。伊能はしばらく迷子になっていたが、知っている曲と言うことで、ほとんどなく流れに乗ってきた。しかし慣れた感じでどんどん進む三人に圧倒されたのか、蚊のなくような音で第一楽章のおしまいまでやつとのことについて来た。尾長が言った。

「いまのテンポじゃ、この曲初めての人には気の毒

だよ。全体もつとゆつくりから始めよう。僕たちも結構雑になつていたから、きちんと弾くようにして見ない？」

「そうした方がいいね」

とビオラの上村も同意した。弦人も、年上の達者な経験者の中に一人入つたのでは伊能でなくても、弾けるものも弾けなくなるだろうと思つたので、ゆつくりのテンポで初めから丁寧に練習することに賛成

した。

今度は伊能も音を間違えたりしながらも、出を間違えたりはせずに弾いた。しかし、弦人は彼女の弾くどのフレーズもあまりにも音楽的でないことにがっかりした。とてもこの曲を知っているとは言えないような弾き方なのだ。

おそらく尾長も含めて三人おじさんたちはみな同じ思いだったはずである。しかし美しい顔を真っ赤

にして必死で弾いている伊能の姿を見ると、誰も彼女を攻めることは出来なかつた。

彼女にこんな思いをさせた責任は、天野、上村、尾長の顔ぶれを知りながら伊能を誘うことに拘つた尾長にこそある。尾長は伊能の何処を見て誘うと言ひ出したのか弦人には理解できなかつた。だからと言つて始まつたばかりで伊能を、井上に交代させることもできない。新しい弦楽四重奏団は、問題を内

に抱えたスタートとなった。

この日、一応四つの楽章を全部弾いた。もともとテンポの遅い第二楽章はともかく、速い第三楽章と第四楽章はかなりゆっくりにテンポを落として弾いた。そのせいか、この曲に慣れたアマチュアでも大抵誰かが必ず一度は落ちる、つまり出を間違える第三楽章で伊能が落ちなかつたので、みんな驚いた。

しかし全曲を通じて、彼女が出す音は精気を書い

ており、歌い方は幼稚としか言いようがないものだった。弦人は二回目の練習会を楽しみにする気分になれなくなっていた。

出を間違えるのは、何回か合わせ練習をすれば何とか正しく出られるようになる。しかし、どんな音色で楽器を鳴らすかということと、メロディーをどのようにに歌うかということはセンスの問題で、それは簡単には変わらない。そのような調子でバイオリ

ンを弾いてきた大人が、急に変わるのには難しい。

弦楽四重奏団で本当に重要なのは、四人のそのよ
うな音楽性のレベルがそこそこに合っていることな
のだ。それは、仮に難しいところは上手く弾けなく
ても、弾けるところをどのよう弾くかで、その人
の音楽性のレベルがわかるのである。

その日の夜、弦人のところに尾長から電話があつ

た。尾長は、伊能があれほどだったことを知らなかったと言った。そして弦人が言った通り第二バイオリンは井上孝子にやってもらえば良かったとも言った。しかしいまさら伊能に辞退してくれとも言えない。尾長は、申し訳なかったと謝ったのだった。謝ってもらってもどうしようもない。弦人は、

「尾長さん。大丈夫ですよ。このメンバーで始めたのだから、この四人でお互いに高めあいながら良い

音楽を作っていきましょうよ。伊能さんも私たち三人の四重奏経験を吸収してもらって、きつと良いメンバーになりますよ」

と、いささか格好つけすぎの返事をして電話を切った。弦人は、あんな綺麗な人がいるのも悪くないと言いかけたが、そんな邪念はよくないと思つて、口に出さなかつた。

一週間後の練習でも《アメリカ》をやった。弦人はこの一週間、伊能の批判ばかりせずには自分はどれだけ弾けているのか、自らの演奏を録音してはそれを聞き返しながら、精一杯練習して臨んだ。

伊能美樹も相当練習してきた跡が見えた。音色や歌い方は変わり無かったが、普通のテンポで合わせるときにも一度も落ちなかった。みんなは、それで伊能を褒めたりはしなかったが、誰の顔にも伊能は

よくさらつてきているなと思つてゐるような表情が伺えた。

それだけでなくビオラの上村も先週よりもかなり冴えていたし、先週は自分の音程が決まらないところぼしていたチェロの尾長も、この日はビシツと決めてきた。それぞれが、『人の振り見て我が振り直せ』という気持ちだったのかもしれない。

弦人、上村、尾長の三人の間には、先週のような

『これではどうにもならんな』というような空気はなくなり、和やかささえ漂っている。

ひとり伊能美樹だけはひどく緊張しているのが傍目にもわかり、その美しい表情を固くしていた。それを見た弦人は、あまりにも気の毒になつて、

「先週は初めてで緊張したと思うけど、今日は先週よりも全然上手く行っているから、リラックスして楽しんでくださいよ」

と伊能に言った。伊能はホツとしたような笑顔を見せたが、

「皆さん素晴らしく弾かれるから、私なんか場違いなところに入ってきたようですみません。オーケストラには私なんかよりも上手い方はいくらでもいらつしやるのだから、私、替わっても良いですけど」と言った。美しい女性のけなげな言葉は、おじさんたちを一層優しくさせた。

「大丈夫ですよ。僕達だって素晴らしくななんかないですよ。ちよつと《アメリカ》を弾きなれているだけだから。一緒に良い音楽を作つて行きましょう」と言つたのは上村で、尾長も、

「先輩達の良いところを盗むつもりで練習したら、伊能さんは若いのだからすぐに良い室内楽奏者になりますよ」と励ました。

こうして二回目の練習会は、和やかな雰囲気の中で進んだ。おじさんたちの慰めと励ましの言葉ではあつたが、伊能の演奏が幼稚で音楽性に欠ける点では先週と何ら変わりが無かつた。

ところが、三回目の練習でもある箇所で伊能はみんなを驚かせた。《アメリカ》の第一楽章の途中で第二バイオリンが一人で力強く飛び出すように弾き始めるところがあるのだが、その二小節間を伊能はそ

の場に相応しい音と勢いで弾いたのだ。それはこれまでの伊能には無かった、まるで別人のような音だった。ただそれに続く音量を落とした速い動きで第一バイオリンの伴奏に回るところでは、指が纏れて上手く行かなかつた。

しかし、二小節だけとは言え、あのような表現が出来たと言うことは、彼女の可能性を示していると弦人は思った。

そして四回目の練習でも、伊能は第二楽章の中間部で、第一バイオリンの三度下でメロディを一緒に弾くところで、弦人に寄り添ったとても良いアンサンブルを見せたのである。

回を追うごとに成長するように見える伊能をみんなは満足しながら、次回はどんな成長振りを見せてくれるのか楽しみにするようになった。

五回目の練習は尾長の家で行なわれた。そして練習の後みんなは食事を呼ばれた。そこで、伊能の成長の秘密が明かされたのだった。

伊能は次の練習までの間、ほとんど一日おきに尾長のレッスンを受けるために、彼の家に通っていたのである。尾長家では、家族みんなで伊能を暖かく迎えたのだそうだ。レッスンは尾長が仕事から帰宅して夕食を済ませた九時過ぎから毎回一時間くらい

行なわれたという。

尾長はチェロ奏者だから、バイオリンのレッスンではない。もっぱら音楽的なことを中心に指導したのである。

尾長の奥さんの話では、少し休憩したらと言ってお茶を持って行って見ていると、それは美樹さんが気の毒になるくらい妥協の無い厳しいレッスンだったそうだ。

この裏話を、伊能自身は恥ずかしそうに、少し頬を赤らめて聞いていた。そして尾長は、

「とりあえず次の練習に直ぐ役立つことをと思つて始めたが、やはりちゃんとしたバイオリンの先生に習った方が良いと思うよ。このような美樹ちゃんにぴったりの良い先生、知っていませんか」と弦人に聞くのだった。

伊能のことを尾長が、ちゃん付けで呼んだことに

弦人は驚いたが、家族ぐるみの付き合いなのだから、
そう言うものだろうとも思った。

伊能美樹も、他の三人に比べれば若いが、すでに
三十代で結婚もして子供もいる。それでいなが
らよくぞ、レッスンにそんなに度々通ったものであ
る。余程四重奏団の中で自分が見劣りしていること
が悔しかったのか、あるいは弦楽四重奏をする魅力
に取り付かれて何とか仲間になり切ろうと思ったの

だろう。

バイオリンの先生を聞かれたが、弦人は自分が習ってきた先生しか知らない。もちろん巷にはバイオリン教室も、バイオリンの先生も数え切れないくらいだが、誰が伊能にとって良い先生なのかなどと言うことは、弦人には判断できなかつた。弦人は、とりあえず自分が習ってきた先生のことを説明した。

伊能は小学校に上がる前にある音楽教室でバイオ

リンを習ったことがあるそうだが、後は誰にもついていないと言う。ただ大学でオーケストラ部に入つて、そこで先輩から教えてもらったことがあるのだそうだ。

ビオラの上村は小さいときはバイオリンを、大学からビオラに変わって、いずれも長い間レッスンを受けてきたが、それは彼が住んでいた東京でのことで、今日のこの場には、バイオリンの先生の情報は、

弦人の先生以外には無かった。それもあつて伊能は、
「私、天野さんの先生に習うことにします」
と、いとも簡単に結論を出した。いづれにしても非常に前向きである。みんなも盛んに伊能のこの姿勢を後押ししたのだった。

この成り行きを、違った意味で歓迎している人がいた。尾長の妻である。誰が見ても大変な美人である伊能が頻繁にやってきて、一時間くらいの間とは

いえ、夫と二人きりの部屋でレッスンをするのである。自分が推薦した手前、伊能がみんなのレベルに近づくように一生懸命な夫の意図はわかるが、妻の立場としてはあまり嬉しいことではなかったのだ。これで伊能はこの家には通ってこなくなると尾長の妻は思った。

伊能のバイオリンのレッスンは弦人の仲立ちで直ぐに始まった。

しかし週に一回くらいと回数には減ったが、やはり尾長の家に、伊能は通ったのである。尾長の妻は、伊能のレッスンをバイオリンの先生に引き渡したのではないかと尾長に質したが尾長は、バイオリンの先生はバイオリンの弾き方を教えるが、《アメリカ》の何処をどのように弾くかは教えないから、それは自分が教えるのだと妻に説明した。尾長の妻に不満は残ったかもしれないが、伊能美樹は明らかにアマ

チュアの室内楽奏者として成長していた。そのおかげで、弦人たちの弦楽四重奏の練習は回を追うごとに充実したし、楽しさも徐々に大きくなっていったのである。

だが如何に伊能が熱心でも、音楽性を含めてバイオリンの演奏が一朝一夕で身につくものではない。それでも尾長は根気良く伊能の面倒を見た。そのため四人集まっつての弦楽四重奏の練習が、さながら伊

能のための室内楽のレッスンの様相を呈するようになったのである。

弦人は以前、ある室内楽のセミナーで、第二バイオリン、ビオラ、チェロの三人が指導者の中に、自分ひとりが受講生として第一バイオリンを受け持つ形のレッスンを受けたことがあったが、いま伊能を生徒としたそのようなレッスンを思い出すのだった。尾長は熱心に指導し、伊能は真面目に取り組んだ

が、室内楽好きの四人が集まってやりたい曲を楽しむというのとは少し違う雰囲気であった。尾長が、伊能の演奏の不十分なところに気付くと直ぐに演奏を止めて、細かく弾き方などを指導するのである。伊能の不十分な箇所は随所にあつたので、弦人と上村はその度に立ち止まって待つことになる。時には弦人たちもアドバイスを求められたりした。これでは演奏を楽しむことにならないのである。

この弦楽四重奏団の練習には、弦人にとってストレスが溜まることがもう一つあった。それは伊能問題ではなく、主として尾長と弦人の間でしばしば起きる意見の衝突であつた。

音楽には当然音量の大小があり、フォルテ、ピアノ、メゾフォルテ等々とさまざまに指示されている。それだけでなく例えばフォルテの部分とピアノの部分の移り変わり方も、徐々に変化していく場合もある。

れば、突然フォルテが現れたり、ピアノに変わったりすることもある。それらは指示されていることもあるが、作曲家によつてはフォルテとピアノの指示だけがあつて、急に变化するのか徐々に变化していくのか指示してないことも少なくない。

これらの場面で尾長と弦人はよく意見が食い違つた。弦人は、アマチュアは極端なくらい差をつけないと、聞いている人には伝わらないと主張するのだ

が、尾長は、弦人の出す音は極端すぎておかしいと言っているのである。そんなとき尾長は、『蚊の鳴き声と大砲の音じゃないのだから』と言う。しかし、アマチュアの演奏で聞く人に伝わらないと言う弦人の意見もおおむね当たっている。コンサートやCDで聞く一流の人たちの演奏では、フォルテと言ってもただ大きいだけでなく、豊かに響く力強い勢いのある音色でフォルテを弾くので聞く者は強い印象を受ける。

またピアノも音が小さいというより、静かさや優しさのこもった音色で、響きそのものは小さくてもホルの隅々にまで届くような、良く楽器を鳴らした音なのである。それらは、アマチュアが充分にはなしえない技術の一つなのである。もちろん持っている楽器の違いもあるだろう。

弦人は尾長の言うことはもつともだと思ひし、そうしたいと思つてゐるが実際にはそのように楽器を

鳴らせないのである。弦人に言わせれば尾長の音もアマチュアとしては素晴らしいが、一流プロの音とは全然違っている。

だから、尾長と弦人の議論は、二人とも言っていることは同じなのだが、現実に出来ることに限界があるために起きるジレンマなのである。にもかかわらず、尾長があまりにも執拗に弦人に注文をつけるので、弦人はいささかうんざりしているのであった。

尾長に言わせれば何度言えば天野は理解するのだと腹立たしいのかもしれない。

そんなとき上村はお互いの言っていることがわかっていてるので、

「どういう音が出したいかというイメージが共有できていれば、後はそれに近づくように努力すれば良いんじゃない」

と仲を取り持つ。実際にはそうするしかないのである。

るから、大抵はそれで二人の議論は納まる。しかし、次の場面でまたまた同様の議論が始まるのである。

〔解散〕

そんなある日、弦人は尾長からメールを受け取った。内容は

「えっ」

と驚くものだった。

『突然で申し訳ないが、四重奏団を辞めさせてもらいます。私事です。が継続できない事情となつたので悪しからずご了承ください』

書いてあるのはそれだけで、その事情と言うのは触れられていなかった。一週間ほど前の練習では何事も無いように、ごく普通に四人で合奏をしたつもりだつたので、弦人は何のことだか飲み込めなかつた。

上村から弦人のところに電話があつたのは、尾長のメールがあつたその夜遅くだった。上村も尾長から同じようなメールを受け取っていたのだ。上村もどう言うことなのか見当が付かないと言つた。ただ、上村は思い当たる節がないわけではないと言つた。

「これは僕の想像に過ぎないのだけど、尾長さんと伊能さんのことに関係があるのじゃないかな。あの二人ただの仲じやなかつたと思いませんか？」

「そう言えばそうかもしれないけど、それでどうして四重奏団を辞めると言うことになるのですか？」

「尾長さんの家庭問題ですよ。もしかしたら伊能さんのところも」

「不倫問題って言うこと？」

「違いますかね？」

「よくわかりませんが」

そんな想像をしてしまったので、弦人も上村も直

接尾長に事情を聞くわけにも行かなくなつた。また弦人は、伊能美樹にも様子を聞こうと思つたが、上村の想像のとおりだと、こちらも聞きにくい。結局、折角始まつた弦楽四重奏団は、これから軌道に乗るといふときにわずか三か月足らずであつけなく解散する羽目になつたのだ。

弦楽四重奏団がなくなつて一年くらいたつたある

休日に、弦人は上村と、井上孝子を呼んで、自宅で三重奏を楽しんだ。ドボルザークのバイオリン二本とピアノという珍しい編成の弦楽三重奏曲だ。編成が特殊なためか、あまり演奏されないがとても良い曲である。

その場では、当然のごとく尾長と伊能の話が出た。このとき尾長も伊能もとつくにオーケストラを辞めていたので、井上も上村も彼らの消息を知らなかつ

た。話題になつたのは、ただの噂話としてではなく、弦楽四重奏団を再開できないかと言うことも視野にあつた。

井上は、もし復活するようになったら、バイオリンとしては用がないが、自分はビオラもできるから弦楽五重奏団にしたらいのと言つて、弦人たちと一緒にアンサンブルがやりたいという意向を示した。

三人が集まっているその場で、弦人が尾長に電話をかけてみることにした。

弦人がおそるおそる電話すると、まずいことに尾長の奥さんが出た。そして、尾長隆文はいないと言ふ。仕事かと聞くと、何と別居しているから、用があるなら彼の携帯にかけてくれと言ふのだった。弦人はほうほうの体で尾長の妻との電話を切つて、尾長の携帯にかけなおした。

今度は尾長が出た。

「おう、久しぶり」

と言うことにはなつたが、結局四重奏団どころではないと言うことで、本題の中身に入ること出来なかつた。切る前に、弦人が伊能がどうしているか知つてゐるかと聞くと、一緒に住んでゐると言うではないか。やはり上村の想像は当たつていたのである。弦人は、男女のこのような事件は、ドラマでは毎日

のように見ているし、現に弦人の両親も、弦人が大學生のときに、父親の女性問題で離婚している。だが、目の前の仲間同士が、実際にそのような関係になるのは、やはり衝撃的といわざるを得ない。

かくして、弦人たちの弦楽四重奏団から尾長と伊能はつきりと消えたことになったのである。

誰か尾長に代わるチェロはいないものかと、集まった三人はあれこれチェロをやっている知り合いを

並べてみたが、尾長ほどのチェロ弾きはなかなかいないと言うことがわかったただけだった。

弦人が発起人になった弦楽四重奏団は、先ずは第二バイオリンで苦勞したが、今度はチェロ探しが必要になってしまったのだ。

先の経験から、チェロさえやっていれば誰でもいいと言うような探し方はしないことにしようと確認しあつた。そして、何処かに四重奏がやりたいと思

っている室内楽好きのチェロがきつといるはずだから、気長に探そうと言うことになった。

「今度は伊能さんみたいな美人はいないから、見つかったチェロが絶世の美女で無い限り大丈夫ね」と井上が皮肉を言った。

(了)

*この物語はすべてフィクションであり、登場する

人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 ≪お蓮・勘兵衛 悲恋の墓≫

第二話 ≪緑のトンネルで≫

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」く手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

String Fiction Series 02

弦楽四重奏団 b

2022年10月30日初版発行

著者:山中與隆

編集:山中伶子

<https://www.ac-illustr.com/>

・タイトル: 弦楽器グラデーション

作者: t-dunさん

イラストのID: 2610321

・タイトル: 花のフレーム2(黒)

作者: 猫エンジンさん

イラストのID: 1587380

<https://www.silhouette-ac.com>

・タイトル: 譜面台

素材のID: 105365

・タイトル: 譜面台

素材のID: 105366

<https://www.photo-ac.com>

・タイトル: チェロ

作者: r*****mさん

写真のID: 3669919

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
